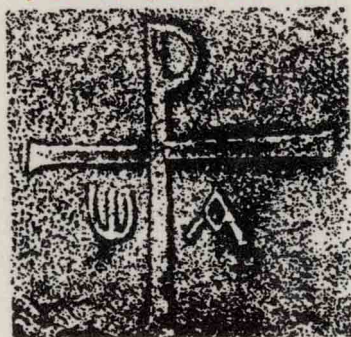


# 福音書講話

グレゴリウス一世 熊谷賢二訳

キリスト教古典叢書 16



上智大学神学部編  
P・ネメシエギ 責任編集  
小高毅  
創文社刊

福音書講話〔キリスト教古典叢書16〕

ISBN4-423-39216-X

1995年1月15日 第1刷印刷

1995年1月20日 第1刷発行

|       |                  |
|-------|------------------|
| 編 集 者 | 上智大学神学部          |
| 編集責任者 | P・ネメシエギ<br>小 高 毅 |
| 訳 者   | 熊 谷 賢 二          |
| 発 行 者 | 久 保 井 浩 俊        |

定価 5974 円 (本体 5800 円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

訳者との申し合せにより検印省略

晒印刷・鈴木製本

## 序 言

古代のローマ教皇のうちで、グレゴリウス一世は、西洋史に最も大きな影響を及ぼした人物であるとともに、最も魅力的な人物でもある。彼の生きた時代はローマ帝国の末期で、災難に満ちていた。最後の強力なビザンティン皇帝ユスティニアヌス（五六五年没）によって、イタリアはゴート族の支配から解放されたが、五六八年にランゴバルド族がイタリアに侵入し、その半島の大部分を占領した。ローマ帝国の支配下に残ったのは、ラヴェンナ、ジェノヴァ、ローマとナポリだけであった。スペインを支配していたゴート族と同様に、ランゴバルド人もキリスト教徒になっていたとはいえアレイオス主義者であり、当時のゲルマン部族のうちで正統信仰のキリスト教を受け入れていたのは、フランク族だけであった。

当時のローマ市は、昔の栄光の影しかとどめなかった。人口は激減し、諸皇帝が建築したりつばな建物は崩壊していた。絶えず続く戦争と災いの中で、中部・南部イタリアの人民の唯一の支えとなっていたのはローマの司教であった。ローマの司教は、自分が使徒ペトロの後継者として全教会の最高責任者であることをすではっきり意識し、ローマ教会がすべての異端に対して常に正統信仰を保持してきたことを誇りにしていた。ローマの司教がシチリアなどで所有していた広大な農地も、彼らの権力を支える基盤となっていた。

グレゴリウスはこのローマで、五四〇年頃、名門貴族の家庭に生まれた。彼は家庭でローマの公務員の最良の伝統を身につけ、当時の上流階級の教育を受け、ラテン語文法、討論術、修辭学、法律などを学んだ。しかし、哲学や自然科学については勉強せず、ギリシア語の知識も初歩的なものであった。彼は家庭の伝統に従って公職

につき、五七〇年にローマ市の長官（市長、*praefectus urbis*）になったが、五七四年に回心を体験し、公職を辞し、カエリウス（*Caelius*）の丘にあった自分の家を修道院にして、数人の同僚と共に、祈り、断食、苦行に専念し、神のみを求める生活に入った。この修道院で過ごした歳月は、彼の生涯を通じて最も幸せな時期であり、彼は後に度々それを懐かしく思い起こしている。

しかし、その修道生活も長く続けることを許されず、彼は五七八年頃助祭に叙階され、五七九年コンスタンティノポリスの宮廷の教皇大使（*apocrisarius*）に任じられ、六年間そこで過ごすことになる。五八五年頃ローマの修道院に帰ることを許されたが、教皇ペラギウス（*Pelagius*）二世から協力を求められて、テヴェレ川の氾濫や伝染病に悩む市民を精力的に助けた。ペラギウスが伝染病にかかって死去したあと、五八九年、グレゴリウスは教皇に選ばれた。彼は初めのうちは任務につくことを拒否したが、ビザンティン皇帝の命令で、五九〇年に教皇の職についた。

グレゴリウスは病弱で、晩年の六年間はほとんど寝たきりであったが、驚くほど大きな業績を残している。

まず、多くの著作がある。

- (一) 『福音書講話』四十講話（*Homiliae in Evangelia*、本邦訳で、これについては後述する）
- (二) 『エゼキエル書講話』二十二講話（*Homiliae in Hiezechielem*）
- (三) 『ヨブ記についての倫理的解釈』（*Moralia in Job*）
- (四) 『雅歌注解』（*Commentarium in Cantica Canticorum*、雅歌の冒頭の教節を解釈する短い書で、B・カペル（*Capelle*）の研究によって、グレゴリオウスの作であることが明らかになった）
- (五) 『列王記注解』（*Commentarium in Librum Regum*、ラヴェンナの修道院長クラウディウス *Claudius* の協力を得てグレゴリウスが著したサムエル記一章——一六章の注解）
- (六) 『イタリアの師父たちの生涯と奇跡についての対話録』（*Dialogi de vita et miraculis Patrum italicorum*）

(七) 『司牧規定』(Libri regulae pastoralis)

(八) そのほか、八五〇通の手紙が保存されており、多面にわたる彼の活動を示している。

グレゴリウスは修道者出身の最初の教皇として、生涯を通して修道精神を保ち、常に正しさを追求し、秩序を重視し、自分の権利のみならず他者の権利が侵害されないように努め、司教をも含めて人々の欠点を厳しく論じ、多くの災害に悩まされていた庶民を助けるために不屈の活動を続けた。ゲルマン諸族に対しては、彼は彼らを滅ぼすことを望まず、正しい信仰に導いてローマ帝国の秩序に組み入れるように尽力した。グレゴリウスは、フランク族、ランゴバルド族とビザンティン帝国の間に和平が実現するように努め、ランゴバルド王子の一人がカトリック教会で洗礼を受けたことを大いに喜んでいる。また、スペインのゴート族の王レッカレドがカトリックに改宗したこともグレゴリウスの大きな喜びであった。そして、最も画期的な出来事は、アングロサクソン族の改宗であった。ケルト国王の依頼に応じてグレゴリウスは、カエリウスの丘の修道院から四十名の修道者を、アウグスティヌスという修道者の指導のもとにイギリスへ派遣し、彼らがカンタベリーを中心とするイギリス教会の基礎を固め、王家と国民をキリスト教へ導いた。

ところで、ビザンティン皇帝と東方教会に対する関係は良好なものではなかった。グレゴリウスはダルマツィア地方の教会に対する統治権をめぐるコンスタンティノポリス総主教と衝突し、同総主教が「世界総主教」と僭称したのに対して強く反対している。マウリティウス(Mauritius)皇帝との関係も冷たいもので、フォカス(Phocas)が内乱を起こして皇帝をその五人の息子と共に殺害して皇帝の位を奪い取ったときにも、別に異議を唱えていない。

しかし、グレゴリウスは、教会での自分の首位権をはっきり意識しつつも、ビザンティン皇帝の権威を認め、フランク王を皇帝の位にあげるといったようなことは夢にも考えなかった。彼の方針が実施されたならば、神聖ドイツ・ローマ帝国は生まれず、皇帝を支配しようとする中世の諸教皇の野望は生じなかったであらうし、おそ

らく、東西教会の分裂も起こらず、世界の歴史は別の方向に進んだことであらう。

### 『福音書講話』

グレゴリウスは教皇になってから二年間、日曜日ごとにローマの諸聖堂で福音書について講話を行い、その内容を五九三年に一冊の書物にまとめて公にした。彼自身が前書きで説明しているように、これらの説教は行われた順番に載せられており、現在まで出版されたすべての原典や翻訳もこの順番に従っている。しかし、この邦訳版では、あえて説教の順番を変えて、四福音書の内容一覽表に見られるような順番にした。それは読者に、いわばグレゴリウスに導かれて、イエスの生涯の様々な出来事を思いめぐらす旅をしてみようと思っただけである。この序言のあとに、説教の元の番号と本書に付けられた番号を示す一覽表を附した。

グレゴリウスの説教は、修辭学の手法を用いず、善良な父親がその子供たちに親しく語りかけているかのような、滑らかな文体で述べられている。これらの説教には、レオ一世教皇の説教の特徴である莊嚴な調子を感じられず、説教者の誠実さと熱意が感じられる。グレゴリウスはヘブライ語を知らず、新約聖書をギリシア語原文で読んでいない。彼以前の教父たちの著作のうちで彼が知っているのは、キプリアヌス、ヒエロニムス、アンブロシウス、アウグスティヌスの著作だけである。聖書の箇所について深い神学的な説明を行っておらず、聖書の各書の著者の意図を探ろうとせず、聖書の各々の書の全体像をよくつかんでいるともいえない。彼が求めたのは、聖書の各部分の(1)字義通りの意味 (*sensus literalis*)、(2)象徴(比喩)的意味 (*sensus allegoricus*)、(3)倫理の意味 (*sensus moralis*) を明らかにすることによって、聴衆の実生活をキリスト教的に導くことであった。聖書の以上の三つの意味に關してオリゲネス以来すべての教父たちが有していた考えを、グレゴリウスもっている。彼はまず聖書の各章句の字義通りの意味を丁寧に取り上げて、それによって聴衆の信仰と道徳を育てようとしている。しかし、彼は聖書のすべての箇所には、この字義通りの意味のほかに、靈的な意味とも呼ばれる

(sensus spiritualis) 象徴的な意味もあると確信していた。神から靈感を受けて書かれた書物である以上、聖書の各言葉は、汲み尽くしたい神秘に満ちている。この神秘を発見するために、グレゴリウスは「類比論法」とも言える思惟方法を用いている。彼によれば、唯一の神の知恵によって創造された宇宙万物の中で、すべてのものは互いに結ばれている。したがって、見えるものは見えないもの、しるしであり、旧約は新約のしるしであり、大自然はキリストの恩恵のしるしであり、数字は象徴的な意味をもつものであり、聖書に出てくる人物たちの名前にも象徴的な意味がある。神の知恵が隠したこれらの様々の関係を、解釈者は発見しなければならない。だから、聖書の一つの箇所には多くの異なった意味がありうる。グレゴリウスは言う。「聖書を解釈するときには、正しい信仰に背いていないところのどんな意味をも排斥してはならない。聖書を理解しようとする唯一の試みによって各々の注解者は、多様な飾りものともいえる無数の解釈を出しているが、それらはすべて天上の花嫁の美を増すものである。」このような考えに基づいてグレゴリウスは豊かな想像力を駆使して、聖書の各々の言葉から多くの不思議な意味を引き出している。それらの意味は、多くの場合、聖書の各書の著者が意図していた意味から遠く離れているものである。しかしそこには、聴衆を誤った方向に導かないことを保証する規則がある。それは、「正しい信仰に背いていないところの」というグレゴリオウスの上述の言葉によって表されているものである。つまり、イエスの教えと新約聖書の根本主張と古代教会の四大公会議（ニカイア、コンスタンティノポリス、エフェソス、カルケドン）の信仰宣言によって表されたキリスト教の神髄こそ、グレゴリウスが試みるすべての解釈の規範である。だから、彼の解釈は、原文の元の意味から遠ざかっていても、キリスト教を歪曲させるものではない。

グレゴリオウスの考えでは、字義通りの意味と霊的な意味との関係は様々である。場合によって字義通りの意味は根のようなものであり、霊的な意味はその根から出た実のようなものである。また、場合によって、字義通りの意味は外面的な事柄に関するものであり、霊的な意味は内面的な心の事柄についてのものである。また、ほか

の場合に字義通りの意味は、「人を殺す」意味であり、霊的な意味は「人を生かす」意味である。他の教父たちと同様に、グレゴリウスも、「文字は殺しますが、霊は生かします」(ニコラント三・六)というパウロの言葉を、パウロが考えた元の意味とは異なった意味で、教えの内容についての指摘として理解している。一例をあげるならば、敵の皆殺しなどのような残酷なことを命じる旧約聖書の箇所にも文字通りに従うならば、人は愛のいのちから離れるが、その言葉を、自分の心に起こる邪念を抹殺するように勧める命令として再解釈するならば、人はいのちへ導く愛の道を進むように励まされるという理解である。

このような精神をもって、グレゴリウスは、第三に、彼が「倫理的な意味」と呼んでいるものを発見するように努める。それはすなわち、聖書の言葉をキリスト者の魂と関係づけることである。彼は言う。「いっそう熱心に永遠のものを憶れるため、神の言葉から神の心を学びなさい。」グレゴリウスは、当時の社会を襲った多くの災害を見て、世の終わりが差し迫っていると考えていた。したがって、彼によれば、このような時代に生きていく人々の唯一の関心事は、神のもとでの永遠のいのちに達することにあるはずである。キリストによって開かれた永遠のいのちへの道を進んでいるのは、まことの愛に生きていく人である。グレゴリウスによれば、「人が神のまことのしもべであるかどうかということの証拠は、その人が行う奇跡ではなく、その人がもっている愛である。」だから、グレゴリウスは、信者でありながら愛の道から離れた生き方をしていく人々に、改心して、償いの業を果たし、愛の業に励むように、切に勧める。彼は罪を犯した人に加えられる神の厳しい罰にしばしば触れているが、その神は、改心して赦しを願う罪人を慈しみ深く赦すと、常に言い添えている。

自然科学に関して無知であったグレゴリウスは、すべての出来事を、あるいは神、あるいは天使、あるいは悪魔の働きの結果と見なしていた。したがって、自然界や歴史のすべての出来事は、人間たちに与えられた神の諭しである。そして、その神は、愛の神である。「愛情が愛(casitas)となりうるため、他者に向かっているものでなければならぬ」という有名な言葉を残したグレゴリウスは、もちろん、「愛の博士」と言われるほどに愛



について優れた教えを残したアウグスティヌスほどの天才的な人物ではない。そのことを彼自身がよく認めていた。あるアフリカの司教がグレゴリウスに著作を送ってくれるように頼んだとき、彼は、「わたしの著作ではなく、アフリカ生まれの偉大な人物アウグスティヌスの著作を読みなさい」と答えている。しかしそれでも、グレゴリウスの著作を読むと、多くの場合、心が和む。「必要なことはただ一つだけである」(ルカー一〇・四二)というイエスの言葉にあるあの「ただ一つだけ」のことを、彼がわたしたちに思い起こさせてくれるからである。日本の読者がこれを体験できれば、幸いである。

近年、グレゴリウス研究は盛んになり、Corpus christianorum と題する教父全集にも、また、フランスで出版される Sources chrétiennes 双書にも、彼の著作の優れた校訂版が出版されている。しかし、中世を通して最もよく読まれた書物である彼の『福音書講話』の新しい校訂版はまだ出版されていない。したがって、邦訳の底本として、ミーニエ教父全集に収録されている、ベネディクト会、サン・モール修族(Mauristes)の校訂版を用いることができなかった。

本書の準備のために多くの方々の協力を得たが、訳者の熊谷賢二氏に、そして原稿を最終的にまとめてくださった小高毅師に特に感謝したい。

〔文献〕

- 朝倉文市、グレゴリウス一世の人と思想、カトリック研究、六十一号(一九九二)七三一—一〇〇  
 F. H. Dudden, Gregory the Great, 2 vol., London 1905  
 P. Batifol, Saint Grégoire le Grand, Paris 1928  
 L. Weber, Hauptfragen der Moralthologie Gregors des Grossen, Freiburg in der Schweiz, 1947  
 D. Dagens, Saint Grégoire le Grand, Culture et expérience chrétienne, Paris 1977

H. Richards, *Consul of God, The Life and Times of Gregory the Great*, London 1980

G. R. Evans, *The Thought of Gregory the Great*, Cambridge 1986

一九九三年五月三一日

ヘトロ・ネメシエギ

本書における順序とミュー教父全集(PL 76)における順序の対照表

| PL 76         | 本書 |              |
|---------------|----|--------------|
| 第 1 講話……………29 |    | 第21講話……………34 |
| 第 2 講話……………26 |    | 第22講話……………35 |
| 第 3 講話……………12 |    | 第23講話……………37 |
| 第 4 講話…………… 8 |    | 第24講話……………39 |
| 第 5 講話…………… 6 |    | 第25講話……………36 |
| 第 6 講話……………10 |    | 第26講話……………38 |
| 第 7 講話…………… 4 |    | 第27講話……………33 |
| 第 8 講話…………… 1 |    | 第28講話…………… 7 |
| 第 9 講話……………31 |    | 第29講話……………40 |
| 第10講話…………… 2  |    | 第30講話……………32 |
| 第11講話……………14  |    | 第31講話……………18 |
| 第12講話……………30  |    | 第32講話……………15 |
| 第13講話……………17  |    | 第33講話……………11 |
| 第14講話……………24  |    | 第34講話……………21 |
| 第15講話……………13  |    | 第35講話……………28 |
| 第16講話…………… 5  |    | 第36講話……………19 |
| 第17講話……………16  |    | 第37講話…………… 9 |
| 第18講話……………23  |    | 第38講話……………20 |
| 第19講話……………25  |    | 第39講話……………27 |
| 第20講話…………… 3  |    | 第40講話……………22 |

# 目次

序言 ..... ペトロ・ネメジエギ ..... i

〔著者グレゴリウスの〕序言 ..... 三

一 キリストの誕生（ルカ二・一―一四） ..... 五

二 三人の博士（マタイ二・一―一二） ..... 九

三 洗礼者ヨハネの宣教（ルカ三・一―一二） ..... 一六

四 洗礼者ヨハネの告白（ヨハネ一・一九―二八） ..... 三三

五 イエス、試みられる（マタイ四・一―一二） ..... 四四

六 すべてを捨ててイエスに従うこと（マタイ四・一八―二二） ..... 五二

七 イエス、役人の息子を癒す――謙虚であること（ヨハネ四・四六―五三） ..... 五九

八 天の国は近い（マタイ一〇・五―一二） ..... 六二

九 主を迎えて（ルカ一四・二五―三三） ..... 六九

一〇 イエスとヨハネ（マタイ一・二―一〇） ..... 八二

一一 イエスと罪深い女（ルカ七・三六―五〇） ..... 八六

一二 イエスの母と兄弟とはだれか（マタイ二・四六―五〇） ..... 一〇二

一三 種蒔きの譬え話（ルカ八・四―一五） ..... 一〇七

|    |                                 |    |
|----|---------------------------------|----|
| 一四 | 天の国の譬え話（マタイ一三・四四―五二）            | 二四 |
| 一五 | 十字架を背負う（ルカ九・二三―二七）              | 二三 |
| 一六 | イエス、七十二人を派遣する——司祭の務め（ルカ一〇・一一九）  | 二三 |
| 一七 | 目を覚ましてキリストを待つ（ルカ一二・三五―四〇）       | 二五 |
| 一八 | 実を結ばない木、腰の曲がった女（ルカ一三・六―一三）      | 一五 |
| 一九 | 主の晩餐会への招き（ルカ一四・一六―二四）           | 一六 |
| 二〇 | 婚宴の譬え話——神への愛、隣人への愛（マタイ二三・一一―一四） | 一八 |
| 二一 | 「見失った羊」と「無くした銀貨」の譬え話            | 二四 |
|    | ——天使について（ルカ二五・一一―一〇）            | 二〇 |
| 二二 | 金持ちとラザロ——富と困窮（ルカ一六・一九―三二）       | 二六 |
| 二三 | イエス、ユダヤ人に侮辱される（ヨハネ八・四六―五九）      | 二五 |
| 二四 | 良い羊飼ひ（ヨハネ一〇・一一―一六）              | 二五 |
| 二五 | 「ぶどう園の労働者」の譬え話（マタイ二〇・一一―一六）     | 二六 |
| 二六 | イエス、盲人を癒される（ルカ一八・三二―四三）         | 二七 |
| 二七 | イエス、泣かれる（ルカ一九・四一―四七）            | 二七 |
| 二八 | 終末の徴——忍耐（ルカ二一・九―一九）             | 二九 |
| 二九 | 世の終り（ルカ二一・二五―三三）                | 三〇 |
| 三〇 | 「十人のおとめ」の譬え話（マタイ二五・一一―一三）       | 三二 |

|    |                                  |    |
|----|----------------------------------|----|
| 三一 | 「タラントン」の譬え話(マタイ二五・一四—三〇)         | 三三 |
| 三二 | 聖霊(ヨハネ一四・二三—三一)                  | 三三 |
| 三三 | 愛の掟(ヨハネ一五・一二—一六)                 | 三三 |
| 三四 | 復活——天使の告知(マルコ一六・一—七)             | 三六 |
| 三五 | 復活——イエスの墓に走るペトロとヨハネ(ヨハネ二〇・一一—一九) | 三六 |
| 三六 | 復活——マグダラのマリヤ(ヨハネ二〇・一一—一八)        | 三七 |
| 三七 | 復活——エマオへの旅人(ルカ二四・一三—三五)          | 三九 |
| 三八 | 復活——弟子たちへの出現(ヨハネ二〇・一九—三一)        | 三九 |
| 三九 | 復活——ティベリアスの海辺での出現(ヨハネ二一・一二—一四)   | 四〇 |
| 四〇 | 主の昇天(マルコ一六・一四—二〇)                | 四九 |
|    | 聖書引用の注                           | 四二 |
|    | 解説の注                             | 四六 |
|    | あとがき                             | 四三 |
|    | 小高毅                              |    |

福音書講話





## 〔著者グレゴリウスの〕序言

神の僕たち<sup>(a)</sup>の僕グレゴリウスより、敬愛する聖なる兄弟、司教セクンディヌス<sup>(b)</sup>殿にご挨拶を申し上げます。

わたしは、ある特定の日に、この教会で慣例に従って朗読される聖なる福音書の四十の箇所を、ミサ聖祭の盛式の中で解説しました。それらの中には、わたしが口述し筆写させ、書記が会衆の前で読み上げたものもあれば、わたし自身が会衆の前で説教し、人々がそのまま書き写したものもあります。しかし、わたしが自分の語ったことを細部にわたって検討して、満足のいくように「原稿を」修正しないうちに、聖なる言葉を学びたいとの熱意に駆られた数人の兄弟たちが、「その原稿を」書き写してしまいました。彼らは、食物がまだ十分に煮えきらないうちにそれを食べようとする、飢えた人のようであると言えましょう。ところで、「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒野に行かれた<sup>(c)</sup>」という言葉をわたしは説明しましたが、初めはかなり曖昧なものでした。しかし、後になって確かなことがわかり、その曖昧な点を取り去るために修正しました<sup>(d)</sup>。その上で、それらの説教を、行った順序に即して二巻に分けてまとめ、第一巻には書記に書き取らせた説教を二十ほど集め、第二巻には会衆の前でわたし自身が行った説教を同じく二十ほど集めました。福音書では後の方に出てくるものが、本書では先に取り上げられたり、福音記者は前の所に書き記しているものが、「本書では」後の所で取り上げられたりしていることもあります。あなたはこのことに驚くことがあつてはなりません。というのは、これらの説教は行われた順に書記たちの手で書き取られ、まとめられたものだからです。

それで、聖なる読書を行おうと絶えず心掛けているあなたは、もし前述の福音書の箇所に関して曖昧な説明を